

# 頻出アイヌ語地名の形態論的構造\*

切替英雄

2004年4月15日

## 1 地名解釈の方法

名前の由来、とくに地名の由来に興味を持つということは、広く見られる人文的な現象であると思われる。日本では既に風土記においてそのような関心があったことが知られている。アイヌにおいても古くから同じような関心があったらしく、たとえば知里幸恵の『アイヌ神謡集』(1923年刊行)には次のような一節がある [21, pp.86-87]。

Pii tuntun, pii tuntun!  
tan hekachi wen hekachi eiki chiki,  
tan esannot teeta rehe tane rehe  
ukaepita eki kushnena!  
パイパイ  
この小僧め悪い小僧め、そんな事するなら  
この岬の、昔の名と今の名を  
言い解いて見ろ

ukaepita「言い解く」とは本来何重にも縛られている紐などを解きほくことをいうのであろう。

アイヌ語・アイヌ文化研究の中であってアイヌ語地名研究は多くの人の関心を引き、また最も盛んな分野の1つである。一方、同じ固有名詞であっても人名の研究はそれほど進んでいない。それは、1つに構造の透明性に違いがあるためと思われる。多くの地名は合成名詞であって、構成要素に分解することが比較的容易にできる。またその構成要素の意味も少なくとも表層的にはおおむね分かっているため地名の由来・意味は個々の構成要素の意味をつなげることから推定することができる。ところが人名ではそのようなことがほとんど不可能である。砂沢クラ氏(1897年生まれ)によれば、旭川に Kosonka'aynu という男性がいたが、その名前は動詞 kosonkokus に由来するという。よその kotan から旭川の近文(ちかぶみ)に嫁いで来た女性が、月が満たないうちに男の子を出産した。それが問題となり、近文とその kotan との間でやり取りがあったそうである。離れた土地の間で何かについて言葉のやり取りがあることを kosonkokus というが、それが kosonka と形を変えてその子の名前になった('aynu は男性の名の末尾につく要素)。ko-sonko-kus は、「～に関して・便り

---

\* 本論文は2000年6月17日に札幌のカデル2・7で行われたアイヌ語地名研究会の例会で読んだものを改訂したものである。改訂にあたり、奥田統己氏(札幌学院大学)、長田俊樹氏(日本文化研究センター)、白石英才氏(千葉大学大学院)の諸氏からいろいろなことを教わった。奥田、長田両氏からは文意をよりよくとのおす工夫を教えられ、白石氏の指摘は考察を深めるきっかけとなった。

が・～（場所）を通る」という構造に分析されるが\*1、kosonka からは ko-sonko-kus にたどりつくことはできない。おそらく名前の由来・意味を隠すための操作が行われたのである。人名における、アナグラムを思わせるようなこの操作についてはほとんど何も分かっていないし、研究者の関心を引いたこともないようである。

さて、アイヌ語地名の研究にはさまざまな取り組み方があるが、いわゆる「地名解」と呼ばれる研究がその中心にある。「地名解」とは何か。それは地名の由来、あるいは地名の意味を明らかにすることを期すものである。

今、地名の由来、地名の意味ということを行ったが、両者は区別して考えなければならない。これを混同して研究を推し進めると何を明らかにしようとしているのか分からなくなる。

私はかつて次のようなことな主旨のことを書いたことがある\*2。

地名の由来とは、命名という行為が行われたときの諸事情のことである。一方、地名の意味とはその地名がアイヌ語を母語とする人の心の内に喚起するイメージのことである。（初めの命名者の意図と後代のアイヌのイメージとが食い違うといったことは当然ありえる）

知里真志保は 1955 年に出版された『斜里町史』の「斜里郡内アイヌ語地名解」のはしがきで次のように述べている [15, p. 250]。

この地名解の中では、これまで現れた他の地名解とは全くちがった立場に於いて、アイヌ語の地名に解釈をほどこした。たとえば普通には「大川」「小川」と訳しているものに「親川」「子川」という解釈をつけたり、「山奥へ行っている川」とか、「原野を通行している川」とか、「死んだ川」とか、何か川が生き物でもあるかのような取りあつかいをしているが、それはまったく、アイヌ語の地名を今のアイヌの老人の心で解釈するのではなく、彼等の先祖である古代の人々の心に立ちいつて解釈しようとする全く新しい方法論に立つからに他ならない。

これは知里の地名研究が地名の意味ではなく、地名の由来を明らかにしようとするものであったことを示している。ただ、知里はこの「全く新しい方法論」がどのようなものか誰にでも分かるように示してくれてはいない。古代の人々の心の中に立ちいるというだけでは方法論を示したことにはならない。しかし、この方法論に触れると思われることが昭和 12 年（1937 年）ごろとされる服部四郎の次の思い出の中に出てくる [18, pp. 7-8]。

そのとき、知里君のアイヌ語研究に関する抱負の一端を聞くことができたが、その中に、「学界では共時論だとか通時論だとか言っているが、単語をできるだけ小さい語根に分析してその意味を考える語源研究が大切だ。」という意味の言葉があった。

知里の「語源研究」がどのようなものであるか見てみよう。例えば「岬」と訳される enrum という単語がある。金田一京助は、この単語は樺太方言では普通に行われているが、北海道方言では叙事詩に現れることを除いて日常語では廃れ、地名、すなわち室蘭の絵鞆、日高の幌泉 (poro enrum)、また襟裳岬にその形をとどめ

\*1 他動詞語根 kus「～が～を通る；～が～を横切る」が他動作主を抱合したまれな構造の動詞である。残念なことに例文の形では採録できなかった。

\*2 原文は次のとおりである。「地名の由来とは、命名という行為が行われたときの諸事情のことだろう。地名の意味とは、その地名がかつてのアイヌ人の心の内に喚起したイメージのことだろう。（初めの命名者の意図と後代のアイヌ人のイメージとが食い違うといったことは当然ありえる）」 [12] 今これを読み返してみても、「かつてのアイヌ人の心の内に喚起したイメージ」というところを「アイヌ語を母語とする人の心の内に喚起するイメージ」と直すべきだと特に思う。今生きているアイヌ語の話し手が地名に対して抱くイメージも当然「地名の意味」に含まれるべきだと思うからである。

ていると述べている [13, pp. 124-125]。知里は、これを en-rum 「つき出ている・頭」と分析する [16, p.26]。なるほどと思わせる分析である。en は een 「～がとがっている」から持ってきたものに違いなく、rum は「鏝」を意味する。本来の形を een-rum としないで en-rum としたのは、een が同じような意味・機能の動詞語根 en から作られた派生動詞であるとみることができるからであり、また、語頭の母音脱落をわざわざ説明しなくてもよいためである。een を現在のアイヌ語学の知識にもとづいて分析しようとする、まず een 自体が「～がとがっている」という意味の自動詞（知里のいう完動詞）であることをおさえておく必要がある。次に een が接頭辞 e- と動詞語根 en とに分けられると仮定する。そのように仮定すれば、een は自動詞であるから「～の先端」という意味の接頭辞 e- と動詞語根 en との結合からなると見るのが最も自然となる。そうすれば、この自動詞語根もやはり「～がとがっている」ないしこれに類似した意味を持っていたと推定できる。つまり、e-en は「～の先端がとがっている」という構造の自動詞ということになり、同時に en という未知であった自動詞語根がここに析出されたことになる。なお、een を再帰接頭辞 he- 「自分の先端」と en に分析することも可能だが、すると全体の構造が「～が自分の先端をとがらせる」、結果として「～がとがっている」ということになり、未知であった他動詞語根 en 「～が～をとがらせる」が析出される。しかしこの解釈の欠点は語頭の h- がなぜ脱落したのかさらに説明しなければならないことにある。この e- 「～の先端」と he- 「自分の先端」、またこれと平行的に、o- 「～の末端」と ho- 「自分の末端」の区別は金田一・知里の研究段階では知られてはおらず、その発見は田村すゞ子に帰せられる [19]。私は he-、ho- を再帰接頭辞と呼ぶ一方で e-、o- を部分接頭辞と呼んでいる。なお、また仮に e-en の e- を金田一が発見したいわゆる「充当相」(applicative) の接頭辞 [22, pp.134-146] とすれば、en が自動詞語根であれば een は他動詞となり、他動詞語根ならば複他動詞となるというふうに、いずれにせよ最初のおさえ、つまり een が「～がとがっている」という意味の自動詞であったことと矛盾する。

以上、enrum をできるだけ小さい語根に分析してその「語源」を見たわけであるが、きわどい分析であることがわかるであろう。そもそも enrum を en と rum に分けなければいけないという根拠はない。同様に een を e- と en に分けなければいけないという根拠もない。分けてみれば語の成り立ちがうまく説明できるといって過ぎない。そしてそれは偶然かもしれない。

知里の語源研究（地名の由来の探求）は以上のようなものである。次に、地名の意味ということについて考えてみたい。地名の意味はアイヌ語の話し手の頭の中を置いて他には存在しない\*3。たとえば私は 1992 年、釧路地方舌辛（したから）の伊良ユリ氏（1911 年生れ）から次のような話を聞いた [8, p. 110]。

布伏内（フプシナイ hupusnay）というのは、松（フプ hup）の沢という意味だ。布伏内の沢には、雑木ばかり生えていたが、奥に 3 本、高さ 1 m（10 m の誤植）位の松があった。それが目だったので、このような名前になった。

知里の地名解に従うならば hup-us-nay 「トドマツが・群生している・沢」となるのであるが\*4、伊良氏ははっきりと 3 本と言っているのである。そして、他の雑木に混じってそれが目だつのでこの名がついているというのである\*5。私は伊良氏の言うことが舌辛の布伏内の名の由来だと主張してはいない。ただ、1 人のアイヌ語の話し手（もっとも伊良氏は潜在的バイリンガル\*6であった）の認識を示したにすぎない。それは事実で

\*3 私のいう「地名の意味」は、服部四郎の『樺太西海岸北部地名の共時論的研究』[18]に影響されて生まれた概念である。

\*4 知里は Sine-sunk-us-i に対して「一本の・エゾマツが・そこにいつも立っている・場所」と解し、us に群在・群生のほか「(そこに)いつもある」という意味もあるという！ [17, pp. 221-225]

\*5 フプシナイの小川は伊良氏宅のそばを流れていた。

\*6 潜在的バイリンガルとは、おそらく幼年期はアイヌ語と日本語とのバイリンガルであったが、学童期以降アイヌ語の運用に抑圧が働いてアイヌ語が使えなくなった人のこと。

ある。それでは知里の地名解、つまり名の由来の探求はどういう事実にもとづいて行われるのであろうか。

地名をその構成要素に分解し、その各々の意味の総和から地名の由来を探るとというのが知里の方法である。これは、知里が創出したわけではない。知里が批判する永田方正の『北海道蝦夷語地名解』（初版 1891 年）[10]にいくらかでも出てくるやり方である。しかしこの書物には同時に私が「地名の意味」と呼んだ、アイヌ語の話し手が地名に触発されて述べたこともかなり出てくる。知里が「今のアイヌの老人の心」というまさにそれである。繰り返しになるが、それは「解釈」ではなく事実の報告である。なるほど永田方正は「地名の由来」と「地名の意味」を混同している。したがってこの書物はごたませである。しかし、アイヌ自身による地名解を記しているところがこの書物のもっとも資料的価値のあるところではないかと私は思う。さらに、私は事実にもとづかない解釈よりも事実そのものの報告の方が—純粋な事実の報告というものはありえず、かならずそれに解釈が紛れるとしても—より学問的\*7だと思う。知里は「古老必ずしも真を語らず」[17, pp. 18-24]といい、古老からの情報に頼る永田や他の研究者の研究を批判するが\*8、私はアイヌの古老による解釈はアイヌ語地名研究の基礎だと考える。アイヌ語の話し手がなす地名解釈をそのままに記録することをアイヌ語地名の「記述的研究」と呼ぼうと思う。服部四郎の「カラフト西海岸北部地名の共時論的研究」[18]はこの記述的研究の古典となっている。

知里流の語源解釈をする場合でも、まず記述的研究をしてからでも遅くはないはずであり、それを避ける理由は何もない。アイヌ語の話し手自身の解釈は常に参照されるべきである。例えば、つぎのような解釈がある。これもやはり伊良氏によるものである [8, p. 109]。

ユブパナイ yuppanay 鹿が出る沢 「いたよ、鹿（が）」という意味だ。

この説明から、yuppanay は yuk-pa-nay 「鹿を見つけた沢」と分析できる。また、伊良氏のアイヌ語では音節末尾の -k が次の p- に同化することを示唆するものである。さて、「いたよ、鹿」という説明は、yuk-pa-nay 「鹿を・見つける・沢」\*9という分析に事実の支えをあたがうものである。とはいえ、この分析とて名の由来を示しているものではない。しかし、この分析は伊良氏の内省をよく説明している。それが無意味であろうはずはない。このような事実の裏づけもなく憶断からたとえ同じ分析を思いついたとして、それにどんな意味があるのであろうか\*10。

では、地名の由来を説くことに客観性を与えることはできないのであろうか。このことに真正面から取り組んでそして成功した人が山田秀三であろう。再び以前書いたことから引用することを諒解していただきたい [12]。

地名と地形とが厳密に対応し合っていること、これこそが山田氏の面目ある発見といえる。

\*7 本論文の草稿を読んできた長田俊樹氏は「学問的」とは何かと尋ねてきたが、ここでは「建設的」という意味に解していただきたい。

\*8 知里はアカザの茎葉 sirúskina を「sir（地）us（にたくさん生えている）kina（草）」と解釈し、それに対する「アイヌ研究者としても名の通っているKという農学博士」からの批判、すなわち「トカチのアイヌの老人」は「sir（粉）us（だらけの）kina（草）」と解釈し、「ビホロの老人」は「sir（臭）us（する）kina（草）」と言ったということを否定しきっているが [17, pp. 10-14]、これらアイヌの老人の解釈にも何か十分な根拠があったと思う。

\*9 §7 で述べる疑似修飾構造をなす地名の例であるが、yup-pa-us-nay となっていないのは注目すべきことである。

\*10 なお、余談ではあるが、アイヌ語地名は作られてから久しい時を経ていると思われがちだが（知里は 1955 年の論文 [15, p. 247] で新しい地名であっても発生して 150 年は経過しているとみている。根拠は不明）、意外に新しいものもあるのではないかとこのことを付言しておきたい。先ほどの布伏内の由来もそれを暗示している。次のは再び伊良氏から得た地名解である [8, p. 110]。  
布伏内の川下にフシココタン（フシココタン husko kotan）というところがある。父がいうには、もとアイヌが住んでいたが屯田兵に追われて川上に移ってきたので、そう名づけられたそうだ。このフシココタンに「イムするパパ」が住んでいた。

山田秀三にとって「地名の意味」とは、同じ、ないし類似した地名のついた場所が示す地理的な共通点ということになる。

上の引用に続いて私は次のような山田の優れた地名解 [6, p. 457] を紹介した [12]。

一例をあげよう。オタ・スツという地名がある。知里真志保博士は、これを「砂浜（の）・根もと」、つまり砂丘が尽きて草原になるあたりのこととした。これで良いように思われ、また確かに、そのようなイメージを持つ後代のアイヌ人もいたことだろうが、山田氏によると、オタ・スツという地名のついたところは、「どこも長い砂浜が、これから岩礫地帯になろうとするあたりの狭い浜である。実際上は砂浜の端の処についた名なのであった。」(下線は切替)

同じ地名がついた複数の場所の地理的な共通点がこのように明らかになれば、それが地名の由来と密接に関係していることは疑い得ない。また、そうであればこそオタスツをオタ「砂浜」とスツ「根もと」に分析することの正当性も獲得できる\*<sup>11</sup>。

同じ方法で山田は地名というよりも地形語彙の1つと呼ぶのにふさわしいものの意味を明らかにすることにも成功している [6, p. 308]。

(本川から一旦分流する川に関して一切替) 分流点をベツ・チャロ (川口)、また本川に入る処をベツプ (川口) の形で呼ぶのがこの辺 (十勝川流域地方— 一切替) での地名習慣なのであった。

地名の由来の探求には、山田の方法と地名の構成要素の意味の総和を求めることが車の両輪のような関係になる必要がある。山田自身それを深く認識していたから永田や知里の地名解を十分に利用している。もっともこの2つのうち地理的な共通点を求めることの方が優先されるべきであり、意味の総和の方はあとからついて来るという形になる。山田はまた、記述的研究が可能であるときは積極的にそれを利用している。ただし、この点に関しては服部のように体系的・組織的ではない。

さて、いよいよ本題に入りたいと思う。地名を構成要素に分析してその意味の総和を求めることは、その背後に事実の裏付けが必要であって、それなくしては「地名の意味」も「地名の由来」も明らかにしたことにならないことはお分かりになったと思う。しかし、地名研究の実態から言えば、「地名の意味」の研究 (記述的研究) はアイヌ語の話し手の減少からもはや難しくなっており、多くの地名研究家は山田流の「地名の由来」の探求に従事していると思う。そのさい、同一地名を持つ複数の場所の地理的共通点を確認する旅に出る前に、地名の分析を行っておくことが普通必要である。地名の発祥地を同定する必要があるからである。われわれはクネベツという川があれば「黒い・川」と分析し、水の黒い川の存在を予想する。スマフレナイという川があれば「石 (が)・赤い・沢」と分析しその沢を遡って赤い石の河床を探す。また、ピランベツという川があれば「小石 (が)・落ちる・川」ではないかと思当をつけ、その川岸にもろい崖を見い出してなるほどと思う (十勝地方本別の郷土史研究家故目黒治助氏による)。そしてそのようなことを複数の地点で行う。

地名の分析を行う上で地名の形態論的構造にどれだけのバリエーションがあるかを知ることが重要である。たとえば、上であげた、クネ・ベツという川の名とスマ・フレ・ナイという沢の名の分析はそれぞれ「自動

\*<sup>11</sup> 『カラフト西海岸北部地名の共時論的研究』 [18, p. 19] でインフォーマントの藤山ハル氏 (1900 年生まれ) は 'otasuh (オタ・スツの方言形) を次のように解釈している

12. 'otasuh [オタシ] (小田洲) 'ota 《砂、砂丘》、suh は不明。[別の地名に現れる suh は「ねもと」と訳されている (p. 31)—切替] (中略) ここの砂は踏むと膝まで位はいる。足を抜いたあとに水がコトコトと煮立ち上がるようになるから suu 《鍋》のようだと言うのか。(中略) 住んだことがないからよくわからない。(後略)

地名の由来の探求を志す知里が「古老かならずしも真を語らず」というのはインフォーマントのこのような語源説をとらえて言うのである。

詞＋主語相当語 (§6.1) と「主語(所属物)＋自動詞＋斜格語相当語(所属先) (§6.4) という構造の類例があるから妥当な分析であるが、ピ・ラン・ベツという分析は類例(主語＋自動詞＋斜格語相当語)に乏しく疑問である\*12というような見直しをもつことは必要である。

このような予測を行う上で有用であると信じて私は以前「アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞」[11] という論文を書いたことがある。ここでは、その論文を継承して地名の代表的な形態論的構造にはどんなものがあるかを述べたいと思う。地図などの文献に現れる地名はさまざまである。その表記がまず間違いなく本来の語形を現していると見ることのできる頻出地名にデータを求めるとより確実な研究が可能となる。珍しい地名の分析は魅力があるけれど、まず平凡な地名の分析から最も普通にみられる形態論的構造を取り出してみるべきである。地名にはアクセンションがつきものである [13, p. 117]。しかし十分な数が分布している地名からは、少なくともその形態論的構造の確かなものが得られるだろう。

資料としては羽田野正隆の「アイヌ語地名の史料における出現頻度」[14] を用いた。これは、松浦武四郎『東西蝦夷山川地理取調図』(1859年刊行)、陸地測量部『5万分の1地形図』(286葉、1886-1896年測量)、永田方正『北海道蝦夷語地名解』(1891年刊行)に現れるすべてのアイヌ語地名の延べ出現数を多い順から178番まで順にあげたものである(異なり語数213)。各地名ごとにこの3つの文献に現れる数とそれを足した数(延べ数)が示してある。延べ数を用いて出現頻度としたことについて、羽田野は「それぞれの史料が異なった記載内容をもって」いることをもって正当化している [14, p. 18]。また、表記が異なっても同一地名と認定できるものとして、Chepotnai を例に次のような語形をあげている。同定は単純な作業でなかったことと推定される [14, p. 19]。

チエフツナイ、チエホツナイ、セフツツナイ、セホチナイ、チェポツナイ、チェプオツナイ

次節以下では、同じ形態論的構造の地名を1つの節であつかうことにする。各節では、まず、羽田野の示すアイヌ語地名を掲げ、次に出現数順位、延べ語数を示す。次に合成名詞としての地名の主要部となってる要素を示す。主要部のない地名は、 $\phi$  で示す。最後に地名の由来・意味に関する事柄を簡単に示す。pet と nai はあえて訳さずベツ、ナイとした。両者とも「川」と訳されることが多いが、ナイはまた「沢」と訳されることもある\*13。(C) とあるものは知里真志保『地名アイヌ語小辞典』[16]からの引用であり、(Y) とあるのは山田秀三『北海道の地名』[6]からの引用である。アイヌ語地名の配列は、主要部のアルファベット順、ついで出現数順位に従う。

アイヌ語地名の引用は原典のままとした。そこでたとえば今まで nay と表記してきたものは nai と表記される。また、原典に誤記・誤植があってもそのまま転記し、その後ろに (sic) と記した。

なお、主要部という概念について簡単に説明しておきたい。たとえば Pirka-pet 「きれいな・川」という地名の中の名詞 pet 「川」は Pirka-pet とだいたい同じ文法的機能を持っている。このような場合 pet を Pirka-pet の「主要部」という。また、Pipa-us-i 「貝(が)・ある・ところ」にみられる -i のような名詞的接尾辞も先の pet に準じるものとして主要部とみなす。一方、Chirai-ot 「イトウ(が)・～に群在する」という地名は ot の目的語に相当する被修飾語(場所を表す名詞)が主要部として期待されるが、それは現れていない。このような地名を主要部のない構造をなすものとする。

\*12 わたしは、pi 「小石」と pet 「川の流れ」の間に suma-hure-nay の suma 「石」と nai 「沢」の間にみられるような所属関係が成立するか疑問に思っている。そのような例があるならばご教示願いたい。

\*13 ベツとナイの違いについては文献 [3, p. 78] を見られたい。

## 2 「名詞」

11 例。最も単純な構造の地名である。しかし中には合成語の可能性が疑われるものもある。

Enrum 178 9 enrum 「岬。[つき出ている・頭]」(C) (「自動詞+主語相当語」の可能性もある。)

Ichan 113 13 ican シャケ・マスの産卵床

Mem 30 25 mem 「清水が湧いて出来ている池または沼で魚が多く入る所」(C)

Moi 127 12 moi 入り江

Nai 13 34 nai ナイ

Pira 60 20 pira 「がけ；土がくずれて地肌のあらわれている崖」(C)

Shikerpe 102 14 shikerpe シコロ(植物)の実

So 139 11 so 「☒水中のかくれ岩 ☒滝(後略)」(C)

Ununkoi 113 13 ununkoi 「川の兩岸が狭い断崖になっていて、川伝いに登って行った人がそこから先へは通り抜けることができず引きかえさねばならぬような地形(後略)」(Y)

Tapkop 9 37 tapkop 「☒離れてぼつんと立っている円山；孤山；孤峰☒尾根の先にたんこぶのように高まっている所(中略)[< tap-ka-o-p (肩・の上・にある・もの) ?]」(C) (目的語+他動詞+主語相当語?)

Ut 178 9 ut 「もと‘あばらね川’の義で、沼などから流れ出た細長い川が海まで行かずに途中で他の川の横腹に肋骨がくつつくように横から注いでいるようなのを云う」(C) 「永田地名解は「ウツ。脇川」と書いた。ウツ(ut 肋)、あるいはウツ・ナイ(肋・川)で呼ばれる川は道内至る処にあって、沼とか大川に肋骨のような感じで繋がっていた川だったらしい。ずいぶんそれらを見てきたのだが、まだそのほんとうの意味は私には理解できないで来たのであった」(Y)

## 3 「名詞+名詞」

以下の 38 例が見られる。後ろの名詞が主要語である。

Kutcharo 102 14 charo 「沼から水の流れ出る口。(中略) kut(咽喉)と char(口)とから成った合成語」(C)

Petcharo 139 11 charo 本川から一旦分流する川に関して「分流点をベツ・チャロ(川口)、また本川に入る処をベツ・プツ(川口)の形で呼ぶのがこの辺での地名習慣なのであった」(Y)

Shumachise 102 14 chise 「いわや(岩屋)」(C)

Kamuichise 178 9 chise 熊の巣(神の家)

Ruchish 93 15 chish 「峠；山の鞍部。[路の・中央のくぼみ]」(C)

Shiretu 44 22 etu 「みさき。[地・先]」(C)

Notetu 102 14 etu 「ノツ(あご、岬)とエトゥ(etu 鼻、岬)を続けて呼んだ形」(Y)

Kotankesh 113 13 kesh コタンの下(しも)

Tokisar 127 12 kisar 「原義‘沼耳’；沼の奥が耳のように陸地に入りこんでいる部分」(C)

Chashikot 5 68 kot 「砦の跡」(C)

Osorkot 139 11 kot 「osor は「尻」、kot は「くぼみ」、尻餅をついた跡のくぼみの意」(C)

Kamuikotan 178 9 kotan 「奇岩怪石が並んでいて、激流がその間を流れている」(Y) 「この処は川の両岸が岩崖になっている」(Y) 「朝里と張碓の間にある海岸大崖の処の名。落石が絶えず陸行者の大難所であった」(Y)

Otamoi 102 14 moi 「オタ・モイ(砂浜の・入江)」(Y)

Utnai 30 25 nai 「もと‘あばらぼね川’の義で、沼などから流れ出た細長い川が海まで行かずに途中で他の川の横腹に肋骨がくっつくように横から注いでいるようなのを云う」(C)

Nitatnai 54 21 nai 「低湿荒野の・川」(Y)

Yamwakkanai 54 21 nai 「冷たい飲み水の流れている川」(Y) (自動詞+主語相当語)+名詞)

Yunai 66 19 nai 「温泉・川」

Rupeshpenai 69 18 nai 山越え、峠越えするとき迎えるナイ ((主語+他動詞+目的語相当辞)+名詞)

Shupunnai 127 12 nai ウグイのナイ

Chikapnai 178 9 nai 鳥のナイ

Netnai 178 9 nai 「根田内 ねだない (中略) 他地方の類型名から見て net-o-nai (漂流・ごちゃごちゃある・川) かとも考えた」(Y) (山田の考えに従うならば、主語+他動詞+目的語相当語となる)

Otanoske (sic) 152 10 noshki 「永田地名解は「オタ・ノシケ。中・浜。浜・中とも。沙場の中央を云ふ」と書いた」(Y)

Shirpa 75 17 pa 「みさき。sir は山、pa は頭、原義は「海中につき出ている山の頭」である」(C)

Peshpake 178 9 pake 「断崖の突端。[pes (断崖) pake (頭部)]」(C)

Toypira (sic) 54 21 pira Toi-pira 土の崖 「tuye-pira 『(川が) 崩す・崖』、または tui-pira 『崩れる(あるいは崩れている)・崖』」(Y) (「他動詞+目的語相当語」、「自動詞+主語相当語」の可能性もある。ただし前者の構造は「頻出アイヌ語地名」には見られない)

Shumpet 44 22 pet 西の川; 油の川 「分からない地名である」(Y)

Nukkipet (sic) 86 16 pet にごった水のペツ 「nup-ki ヌプキにぎり水 [< nup-ke (野・油)]」(C)

Topet 139 11 pet 「松浦図を開いて見たら、当別川下流の西側(今の石狩太美駅の近らしい)に、昔は沼が並んでいたのだった」(Y)

Menashpet 152 10 pet 「menash-pet 東・川」(Y)

Ushishpet 178 9 pet 「永田地名解は『ウシシ・ペツ ushish-pet。蹄川。鹿跡多き川。川上アイヌ某云ふ。イシシュペツにて雪水多く下り陸に氾濫するを以て名く』と書いた」(Y)

Toput 21 28 put 沼の口

Yukrupeshpe 69 18 rupeshpe 「yuk-ru-pes-pe 鹿・路・下る・もの(沢)」(Y) 鹿の峠道(名詞+{主語+他動詞+目的語相当辞})

Otashut 178 9 shut 「オタスツという地名は後志の海岸に数カ所あるのであるが、どこも長い砂浜が、これから岩磯地帯になろうとするあたりの狭い浜である。実際上は砂浜の端の処についた名なのであった」(Y)

Menashtomari 93 15 tomari 東の停泊地

Pikatomari 113 13 tomari ピカタ(風の名)の停泊地

Shumatomari 178 9 tomari 石の停泊地

Arutur (Y: ar-utor) 113 13 utor 「向こう側の・斜面(岬山の向うの土地)」(Y)



## 4 「名詞＋位置名詞」

位置名詞とは、「～の行く手」とか「～の下」とか「～の間」などのように基準となる名詞を目的語としてとり位置を表す名詞類である。

Toetok 93 15 etok 「to-etok 湖の奥」(Y)

Ruchishpok 178 9 pok 「ruchish-pok-kus-pet 峠・の下・を通過している・川」(Y) (名詞＋名詞)＋位置名詞)

Piratur 75 17 utur 「崖の間」(C)

## 5 「連体詞＋名詞」

連体詞とはもっぱら名詞を修飾する働きを有し、述語とならないものをいう。以下の13例がある。

Moiwa 75 17 iwa 「mo-iwa 小さい・山」(Y)\*<sup>14</sup>

Tukotan 23 27 kotan 「廃村 【ビホロ】墓場」(C)

Pankenai 30 25 nai 川下のナイ

Penkenai 44 22 nai 川上のナイ

Mopet 44 22 pet 小さなペツ\*<sup>15</sup>

Shipet 113 13 pet 本流

Motomari 178 9 tomari 小さな停泊地

Pankeyara 178 9 yara 「永田地名解は「ヤーラ。破れ川」と書いた。ヤラ(yar)は破れる(破れている)、すり切れる(すり切れている)の意。現在では何のことか分からないが、川口の辺でも水で崩れる川だったろうか。ヤラはまた樹皮の意にも使った。樹皮で曲げものの家具を作ったりした。それを採りに行く川であったのかもしれない」(Y)

Penkeyara 178 9 yara

Penkeporonai 139 11 nai 「penke-poro-nai 上の・大・沢」(Y) (連体詞＋{自動詞＋主語相当語})

Pankeporonai 152 10 nai 「パンケ・ポロナイ(panke-poro-nai 下の・大・沢」(Y) (連体詞＋{自動詞＋主語相当語})

Pankerupeshpe 102 14 rupeshpe 「下の・峠道川」(Y) (連体詞＋{主語＋他動詞＋目的語相当辞})

Penkerupeshpe 113 13 rupeshpe 上の「峠道川」(Y) (連体詞＋{主語＋他動詞＋目的語相当辞})

## 6 修飾構造をなす地名

修飾構造をなす地名とは修飾構造をなす名詞句の特殊なものであって、それは次のようなものである [11, pp. 105-106]。

\*<sup>14</sup> 十勝太の加藤ヤイ氏(1922年生まれ)によれば、móywa という音形であった [9, p. 148]。

\*<sup>15</sup> 東静内の葛野辰次郎氏(1910年生まれ)によれば、これと同じ音節構造の山の名に mocíp 「小さな舟」がある [7, p. 111]。

名詞句の構造は、修飾語である動詞が述語をなす場合の文の構造と密接な関係にある。名詞句に対しこのような関係にある文をその名詞句に「相当する文」と呼ぶ。(中略) 一群の名詞句は、それに相当する文に不可欠なすべての構成要素から構成される。

以下この類の地名を見ていくことにする。「自動詞＋主語相当語」 (§6.1、59 例)、「主語＋他動詞＋目的語相当語」 (§6.2、38 例)、「目的語＋他動詞＋主語相当語」 (§6.3、13 例) の他に、修飾部と主要語が所属関に支えられて修飾構造をなしているものとして「主語(所属物)＋自動詞＋斜格語相当語(所属先)」 (§6.4、9 例)、「目的語相当辞(所属物)＋主語＋他動詞＋斜格語相当語(所属先)」 (§6.5、3 例) がある。斜格語とは文における主語、目的語以外の名詞項と理解されたい。

## 6.1 「自動詞＋主語相当語」

Porohattar 152 10 hattar 大きな淵

Poroichan 152 10 ichan 大きな産卵床

Porokenashi (sic) 139 11 kenash 大きな・川沿いの木原

Oyakot 113 13 kot;  $\phi$  「永田地名解は(中略)『オヤ・コツ oya-kot (外の・地面)。湖中に差出たる岬上の地面を云ふ』と解釈している。知里小辞典では『オ・ヤ・コツ o-ya-kot (半島)』として、その語義を『尻(が)・陸岸(に)・くっついている』と説明している」(Y) 知里の解釈に従うならば「主語相当辞[所属物]＋目的語＋他動詞」の可能性もある。すなわち、o-ya-kot は o- 「～の尻」の所属先、つまり修飾語になるはずの半島を表す要素を欠いている。その欠けたものを指示する地名となる。主要語のない地名 (§8) である。「頻出アイヌ語地名」にはこれに類する主要語のない地名はない。

Porokot 139 11 kot 大きな凹み

Ashirkotan 60 20 kotan 「新しい・村」(Y)

Tannemem 178 9 mem 長いメム

Poromoi 40 23 moi 大きな入り江

Ponmoi 44 22 moi 小さな入り江

Onnemoi 178 9 moi 大きな入り江

Ponmoshir 102 14 moshir 小さな島

Poronai 1 136 nai 大きなナイ

Onnenai 2 121 nai 大きなナイ

Chararsenai/Charsenai 4 72 nai 「chár-ar-se (中略) すべてている；すべり降りている。— 川について云えば、小川が山の斜面を急流をなして飛沫をあげながら流れ下っているさま」(C)

Ponnai 6 45 nai 小さなナイ

Raunenai 6 45 nai 「細く深く掘れた沢；或はそういう沢を流れている谷川」(C)

Oohonai 12 35 nai 深いナイ

Wennai 44 22 nai 悪い川 「道内諸地に同名があるのであるが、どう悪かったのかは殆ど分からなくなっている」(Y)

Satnai 75 17 nai 「から沢」(C) 「渇水期になれば、乾いた砂利川原が広がる川だったであろう」(Y)

Satteknai 86 16 nai 「乾期になると水が砂利の下にしみ込んで、水流がやせ細る川」(Y)

Tannenai 86 16 nai 長いナイ

Hurenai 113 13 nai 赤いナイ

Chashnai 152 10 nai 「永田地名解は『チャシ・ナイ。早川。トク土人云、チャシはホユブに同じ。走るの義。故に早川の義なりと、コトニ土人又一云ふ。チャシは柴なり、此辺小木多し、故にチャシナイと云ふ。二説並びに通ず』と書いた。(中略) ふうならチャシ・ナイ(柴・川)と解されるのが自然な名なのであるが(後略)」(Y) (「名詞+名詞」の可能性もある)

Wennotu (sic) 178 9 not 「ウェン・ノツ(wen-not 悪い・岬)(中略)永田地名解はここでも『岬下に暗礁多く舟行がたし』とその悪い理由を書いている」(Y)

Poronup 178 9 nup 「poro-nup 大きい・野原」(Y)

Poronupka 178 9 nupka 大きな「ヌブカ(nup-ka 野の・表面 → 野原)」(Y) (自動詞+ {名詞+位置名詞})

Poronutap 152 10 nutap 大きなヌタブ。nutap 「川の彎曲内の土地 【ナヨロ】山下の川ぞいの平地 【サマニ】川ぞいの岩崖の上の平地」(C) 「一段高くなった山の上に広い湿原(nutap)があって(後略)」(Y)

Hurepet 9 37 pet 赤いペツ(hure に関して)「川について云えば古川などで水が停滞し、やち気で底が赤くなっているようなものに云う」(C)

Hushkopet 13 34 pet 「フシコ・ペツ(hushko-pet 古い・川)の意。今は登別川と離れた小川であるが、昔は登別川の下流がその川筋を流れた時代があったといわれ、登別川の古川の意で(後略)」(Y)

Poropet 13 34 pet 大きなペツ

Ponpet 16 32 pet 小さなペツ

Wenpet 35 24 pet (wen に関して)「地名に出てくる時は、峻険な場所、交通困難な場所、飲用にならない水、何か事故のあった不吉な場所などを示す」(C) 「道内にウェンペツ、ウェンナイの名が多いが、殆ど何で悪いのか分からなくなっている」(Y)

Raypet 44 22 pet 「死んだ川」(C); 「古川で水が流れるとも見えず停滞しているもの」(C)

Onnepet 86 16 pet 大きなペツ

Kunnepet 127 12 pet 「kunne-pet 黒い・川」(Y)

Pirkapet 178 9 pet 「川に行って見ると何ともきれいな水が流れている。それで pirka-pet(いい・川)と呼んだものか」(Y)

Poropinai 44 22 pinai 大きな「石・沢」(Y); 大きな「傷・沢」(Y) (自動詞+ {名詞+名詞})

Poropiri 152 10 pir;φ 「pir, i びル 傷うずまき; 渦流」(C) この地名の第2要素が pir ではなく piri 「～の傷」(pir の所属形)ならば所属先を指示する主要語がない地名ということになり、その構造は「自動詞+主語相当語(所属物)」である。「頻出アイヌ語地名」における主要語がない地名 (§8)には類例がない。

Ripira 18 29 pira 高い崖

Ponpira 35 24 pira 小さな崖

Tannepira 44 22 pira 長い崖

Hurepira 86 16 pira 赤い崖

Kunnepira 178 9 pira 黒い崖

Ponporonai 152 10 poronai 「pon-poronai 小さい・幌内川([幌内川の]支流)」(Y) (自動詞+ {自動詞+主語相当語})

Ponrupeshpe 178 9 rupeshpe 小さな「峠道川」(Y) (自動詞+ {主語+他動詞+目的語相当辞})

Tanneshirar 113 13 shirar 長い岩(岩盤)

Wenshir 113 13 shir 「ウェンシリ (wen-shir 悪い・山) は諸地にあり、「断崖」のことである」(Y)  
 Poroshiretu 178 9 shiretu 大きな「shir-etu 岬 ← 地の・鼻」(C) (自動詞+ {名詞+名詞})  
 Hureshuma 93 15 shuma 赤い石  
 Poroso 30 25 so 大きな滝  
 Ponso 152 10 so 小さな滝  
 Ponto 40 23 to 小さな沼  
 Poroto 102 14 to 大きな沼  
 Onneto 127 12 to 大きな沼  
 Huretoy (sic) 178 9 toi 赤い土  
 Pontomari 35 24 tomari 小さな碇泊地  
 Protomari 127 12 tomari 大きな停泊地  
 Wentomari 127 12 tomari 悪い停泊地  
 Yamwakka 60 20 wakka 冷たい水

## 6.2 「主語+他動詞+目的語相当語」

この構造における他動詞はすべて場所を目的語とするもので、存在を表すか (o, oma, ot, un, ush)、移動を表す (kush, pesh, turasi)。

Niomoi 75 17 moi 「Ni-o-moy 寄り木が・そこに・ごちゃごちゃ集まる・入江」(C)  
 Hupushnai 23 23 nai トドマツのあるナイ  
 Kuonai 35 24 nai 仕掛け弓のあるナイ  
 Chepunnai 40 23 nai 魚のいるナイ  
 Chepotnai 44 22 nai 魚のいるナイ  
 Kuomanai 60 20 nai 仕掛け弓があるナイ  
 Topushnai 60 20 nai 「竹が・群生する・川」(Y)  
 Rukushnai 69 18 nai 「道が・通っている・沢」(Y) (山越え、峠越えをする道の通っているナイ)  
 Humpeomanai 75 17 nai 「hunbe-oma-nai (鯨が・入った・川)」(Y)  
 Rutrashnai (sic) 75 17 nai 「ru-turash-nai 道が・(川に沿って) 上がっている・川」(Y)  
 Soushnai 75 17 nai 「so-ush-nai 滝・ある・川」(Y)  
 Moseushnai 93 15 nai イラクサの生えているナイ；草を刈るナイ (「自動詞+ ush + 斜格語相当語」の可能性がある。cf. 7.1)  
 Rarmaniushnai 93 15 nai オンコの生えているナイ  
 Rupeshnai 93 15 nai 「ru-pesh-nai (路が・下がっている・沢)」(Y)  
 Shurkomanai 93 15 nai 「shurku-oma-nai とりかぶとの根・がある・川」(Y)  
 Wakkakushnai 113 13 nai 水が通るナイ  
 Shushushnai 127 12 nai ヤナギ (shushu) が生えている (ush) ナイ  
 Pukusaushnai 139 11 nai ギョーゲンニクが生えているナイ  
 Chikapunnai 152 10 nai 鳥がいるナイ  
 Kinaushnai 152 10 nai 「蒲が・群生している・川」(Y)

- Kiushnai 152 10 nai カヤの生えているナイ  
 Chiraiotnai 178 9 nai 「いとう魚・たくさんいる」(Y) ナイ  
 Soushpēt 102 14 pet 「川筋の支流がこの川に入る処に滝が多く、一番滝から五番滝までずらっと並んでいた」(C)  
 Rukushpet 152 10 pet 「永田地名解はルクシペツ。山越。古へ斜里郡へ山越したる路なり」と書いた。ル・クシ・ペツ (ru-kush-pet 道が・通る・川) の意」(Y)  
 Seiopet 178 9 pet 「セイヨウベツ川 (中略) 東蝦夷日誌は『セヨベツプト (putu その川口)。此川上に貝石多き故に号く。余もすこし拾得たり』と書き、永田地名解も同じことを記す。セヨベツ (貝殻・多くある・川) の意」(Y)  
 Seiopira 178 9 pira 「セイ・オ・ピラ (sei-o-pira 貝殻・多くある・崖)」(Y)  
 Chikapunto 152 10 to 鳥がいる沼

### 6.2.1 目的語相当語の位置を名詞的接尾辞が占めているもの

修飾部の動詞は存在を表す ush が圧倒的に多い。

- Peteukopi 6 45 -i;φ 「川の合流点 [ < pet-e-u-ko-hopi-i (川が・そこで・互いに・捨て去る・所) ]」(C)、  
 「hópi [複 hop-pa] ほピ ((不完)) 残しる」(C)

知里の u-ko-hopi の解釈「互いに・捨て去る」は「～(複数のもの)が互いに他を捨て去る(捨て去り合う)」ということだろう。だが、u-ko-hopi はそのようには解釈できない。その意味ならば u-hopi あるいは u-hoppa となるであろう(どちらの形になるかは分からない)。u-ko-hopi は「～(複数のもの)がそろって～を捨て去る」と解釈するのが正しい。次に、知里にならって e-u-ko-hopi の e- を充当相の接頭辞とみたら「～(複数のもの)が～(場所)でそろって～を捨て去る」のように解釈される。すると Pet-e-u-ko-hopi-i は「(別れた)川がそろって～を捨て去るところ」となり、何を捨て去るのが示されないことになる。したがって e- を充当相の接頭辞と見ることも誤りである。

そこで e- を部分接頭辞とみて、次のように解釈する。e-u-ko-hopi 「～(複数のもの)の先端が(e-)・そろって(u-ko-)・～を捨て去る(hopi)」。Pet-e-u-ko-hopi 「(別れた)川の先端がそろって～を捨て去る」、主要語として -i を補えば、Pet-e-u-ko-hopi-i 「(別れた)川の先端がそろって捨て去るところ」という修飾構造となる。しかし、§8.2 に示されるように「主語(pet) + 他動詞(e-u-ko-hopi)」という主要語のない構造とみれば -i を補う必要はないし、その脱落を説明する必要もなくなる。

参考。「ni 'e'ukopi ka 'an pe 棒の先が分かれているもの(カワウソの首を抑えて捕らえる木の棒)」(沢井トメノ氏 1906 年生まれ) この句では、ni と 'e'ukopi ka 'an pe が同格であると考えられる。'e'ukopi ka 'an pe 「先が分かれているもの」は「自動詞+助動詞句+主語相当辞」という構造の名詞句と考えられる。したがって、eukopi は素直に解釈すれば「～の先端が分かれる」、Peteukopi は「川の先端が分かれる」という意味となる。しかしこれでは「類出アイヌ語地名」には見当たらない「主語+自動詞」という構造になってしまう。

- Pipaushi 18 29 -i カワシンジュガイがあるところ  
 Kinaushi 54 21 -i キナが生えているところ  
 Setaniushi 152 10 -i (瀬戸瀬川に関して)「旧図や永田氏の挙げた形なら、Setani-ush-i-utur-kot 「エゾノリ  
 ンゴ・群生する・処・の間の・谷間(窪地)」とでも解すべきか」(山田 [5, p.96])  
 Shumaushi 75 17 -i 石があるところ

- Kuttarushi 86 16 -i 「kuttar-ush-i いたどり・群生する・処」(Y)
- Kumaushi 139 11 -i 「kuma-ush-i 物乾し棚・多くある・処」(Y)
- Inaushi 152 10 -i 「inau-ush-i 木幣・ある・処」(Y)
- Tatniushi 178 9 -i 「tatni-us(-i) 樺の木・群生する(・もの、川)」(Y)
- Moseushi 86 16 -i イラクサの生えているところ；草を刈るところ (mose が「～が草を刈る」の意味とすれば「自動詞+ ush +斜格語相当辞」(cf. 7.1.1)となる)
- Rupeshpe 3 88 -pe 「山を超えて向うの土地へ降りて行く路のある川」(C)

### 6.3 「目的語+他動詞+主語相当語」

この構造においても §6.2 と同様、修飾部の動詞は場所を目的語とする oma、un、ush、kush が占めている。

- Nuppaomanai 9 37 nai 野の上手にあるナイ
- Niseikeshomanai 54 21 nai 「峡谷の・末端に・ある・川」(Y) ({{名詞+名詞} +他動詞+名詞)
- Pirauturomanai 93 15 nai 崖の間にあるナイ ({{名詞+位置名詞} +他動詞+名詞)
- Kenashpaomanai 113 13 nai 川沿いの林の上(かみ)にあるナイ ({{名詞+名詞} +他動詞+名詞)
- Nupuripaomanai 152 10 nai 「nupuri-pa-oma-nai 山の・上手・にある・川」(Y) ({{名詞+名詞} +他動詞+名詞)
- Otanoskeomanai (sic) 152 10 nai 砂浜の中程 noshki にあるナイ ({{名詞+名詞} +他動詞+名詞)
- Pirakeshomanai 152 10 nai 「pira-kesh 崖の・末端」(Y) にあるナイ ({{名詞+名詞} +他動詞+名詞)
- Piraomanai 152 10 nai 崖にあるナイ
- Pirapakushnai 152 10 nai 「pira-pa 崖の・上手」(Y) を通るナイ ({{名詞+名詞} +他動詞+名詞)
- Taiunnai 178 9 nai 林にあるナイ(?)。参考:「多寄 たよろ (中略) 永田地名解は「タヨロマ・ペツ。林川。タイ・オロ・オマ・ペツの急言。林・中・にある・川の意」と書いた」(Y)
- Makunpet 30 25 pet 「大川の分流が山側を回ってまた本流に合している場合に、その分流をこの言葉で呼んでいたようで(後略)」(Y)
- Kimkushpet 178 9 pet 参照:「キム・クシ・メム(山の方を・通る・泉池)」(Y)

#### 6.3.1 主語相当語の位置を名詞的接尾辞が占めているもの

- Niseikeshomap 152 10 -p 「nisei-kesh-oma-p 峡谷の・末端・にある・もの(川)」(Y) ({{名詞+名詞} +他動詞+名詞的接尾辞)

### 6.4 「主語(所属物)+自動詞+斜格語相当語(所属先)」

- Putwennai (sic) 178 9 nai 正しくは putu-wen-nai。川口が悪い、そういう川口を持ったナイ
- Shumarupnenai 178 9 nai 石が大きい、そういう石のあるナイ

## 6.5 主語（所属物）の位置を部分接頭辞が占めているもの

Oukotnai 17 31 nai 「二つの川が川尻で合流しているものを云う」(C)

Osatnai 35 24 nai 「この川は乾期になると流水がなくなって川底が乾くのでその名があった」(Y)

Omunai 75 17 nai 「o-mu-nai (川尻・塞がる・川) は、風や潮流で砂が川口を塞いでしまう川」(Y)

Ochararsenai/Ocharsenai 152 10 nai ナイの川尻が滑り降りる、そういう川尻をもったナイ

Osarunnai 139 11 nai 川尻がヨシ原にある、そういう川尻を持ったナイ

### 6.5.1 主語相当辞（所属物）＋目的語＋他動詞＋斜格語相当辞（所属先）

Opekkaushi (sic) 60 20 -i 「o(尻、陰部) pet(川) ka(上、＝岸) usi(につけている) i(もの)」(C; 下線は切替)  
「三角山の尻が大崖になって川に突き出している（中略）。諸地のオペッカウシを見て来たがどれも、同形である」(Y) 知里の解釈は誤りであって、彼が o-「～の尻」（部分接頭辞）と ho-「自分の尻」（再帰接頭辞）の区別は無頓着であったことを示している。ここでは o（尻、陰部）が再帰的にとらえられている。正しくは部分接頭辞であって、「尻（o-）が川の水面（pet-ka）につけている（ush）、そういう尻を持ったところ（-i）」という構造となる。

Osaushi 178 9 -i 「o-sa-ush-i（山の）尻が・浜（大川端）に・ついている・処」(Y)

## 6.6 「目的語相当辞（所属物）＋主語＋他動詞＋斜格語相当語（所属先）」

Osoushnai 23 27 nai 川尻に滝がついている、そういう川尻を持っているナイ

### 6.6.1 斜格語相当語（所属先）の位置を名詞的接尾辞が占めているもの

Osoushi 21 28 -i 川尻に滝がついている、そういう川尻を持っているところ

Oniop 152 10 -p 「原義‘川尻（或は陰部）に木の集まる者’。川口に流木の寄り集る川。湾口に流木のたまる湾」(C)

## 7 疑似修飾構造をなす地名

疑似修飾構造は合成名詞の構造に認められるものであり、修飾部に動詞があり、被修飾部が名詞であるにもかかわらず修飾構造 (§6) をなしていないものである。「アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞」では次のように規定されている [11, p. 112]。

（疑似修飾構造とは一切替）主語を欠く自動詞的形式と二次的構成要素である名詞との結合である。ここで自動詞的形式とは、「目的語・他動詞」および「i・他動詞」などを含むものとする\*16。

疑似修飾構造において自動詞的形式は行為を示す名詞として機能していると考えられ、そのためこの構造は「名詞＋名詞」の型に分類されている。

\*16 日高地方浦河の ci-nomi-shir (§8) の構造を考慮すると「ci・他動詞」のあるものも主語を欠く自動詞的形式に含まれよう。

二次的構成要素とは相当する文において後置詞的副詞 'ari 「～（道具・手段）で」など、ないし後置詞的副詞句 'ot ta 「～（場所）で・に」などを伴う斜格語として現れるものである<sup>\*17</sup>。本論文では斜格語相当語と呼ぶことにする。

すでに述べた所属先を示す斜格語相当語は相当する文において所属関係に支えられた要素であるが、疑似修飾構造に現れる斜格語相当語は、相当する文において後置詞的副詞（句）を伴って現れる要素であり、しかもこの後置詞的副詞（句）は修飾部に現れないから、いわば統語論的な支えを失ったものである。

「頻出アイヌ語地名」に現れる疑似修飾構造にはすべて地名特有の要素が現れる。例。

Terke-ush-nai 「～が飛びはねる + ush + ナイ」（自動詞 + ush + 斜格語相当語）

「川」が「飛びはねる」のでないことに注意。飛びはねて行くのは人間である。このように「頻出アイヌ語地名」では自動詞的形式と斜格語相当語との間に ush が挿入されるのである。この ush を知里は「(動詞の後ろについて) いつもそこでその動作が行われることを示す。」と述べ、kito-ta-us-nay 「ギョー・ジャンニクを・掘り・つけている・沢」などの例をあげている [16, pp. 138-139] [17, pp. 225-226] (us = ush)。このように ush がアスペクトを表す助動詞のような機能を持っているというのが知里の説であるが、それならば修飾構造でも用いられてよさそうである。しかしそれについての言及はない。知里はおそらくこの ush を存在を表す他動詞 ush と多義の関係にあると考えていたに違いない（後述）。しかし ush はむしろ地名における疑似修飾構造の修飾部と被修飾部の間に挿入される形式的な要素に過ぎないのかもしれない。だがそれはまだ断定はできない。kito-ta-us-nai (us = ush) に対して kito-ta-nai という地名があり、対立しているか否か確認する必要がある。対立しているなら ush に何か実質的な意味があることになる。この点についても地名を深く研究している方のご教示が得られれば幸いである。また、yuppanay 「鹿を見つけた沢」のような ush の挿入されない疑似修飾構造の地名の存在もさらに確認していかなければならない。ともあれ、ush は、疑似修飾構造をなす「頻出アイヌ語地名」において主語を欠く自動詞的形式と斜格語相当語を結び付けるものである。

ush が地名において実質的な内容を持たない形式的なものとすると、これと似た形式的な機能を持つものに、主に道具を表す合成名詞にみられた不定人称接頭辞目的格形 i- が思い出される。i- は疑似修飾構造の成立要件を満たすためについたものである。

i-ri-makiri 「それを・はぐ・小刀」（動物の皮をはぐとき用いる。ri 「～が～をはぐ」） [11, p. 111]。  
ri-makiri とはならない（「他動詞 + 斜格語相当語」という違反した構造になるから）。

また主に暦や自然現象を表す合成名詞にみられた使役接尾辞 -ka、-re など疑似修飾構造の成立要件を満たすためのものである。

mun tuk-ka cup 「草（を）・突き出す・月」（5月。tuk 「～が突き出る」。tuk-ka 「～が～を突き出す」） [11, p. 114] mun tuk cup とはならない（「主語 + 自動詞 + 斜格語相当語」という違反した構造になるから）。

upas ru-re okimunpe 「雪（を）・溶かす・洪水」（春の雪どけ水による洪水。ru 「～が溶ける」。ru-re 「～が～を溶かす」） [11, p. 114] upas ru okimunpe とはならない（「主語 + 自動詞 + 斜格語相当語」という違反した構造になるから）。

<sup>\*17</sup> kim 「山」や ka 「～の上」のように後置詞 ta 「～（場所）で・に」が直接接合しえる名詞類は被修飾語になることがないので、その類の斜格語には今言及する必要はない。



ush がこれら不定人称接頭辞目的格形や使役接尾辞と異なるのは、それが疑似修飾構造の成立要件を満たすためにあるのではなく、単に疑似修飾構造に現れるにすぎないということである。先に述べたように知里はこれを「(動詞の後ろについて) いつもそこでその動作がおこなわれることを示す」ものとしている。この機能は『地名アイヌ語小辞典』[16]でのこの語の取り扱い方から見て「群在・群生する」「そこにいつもある」を意味する不完動詞(=他動詞)のもつ機能である。これは真正な動詞としての機能なのだろうか、それとも助動詞としての機能なのだろうか(助動詞には他動詞由来のものが多い)。動詞であるならば、「主語(自動詞的形式)+他動詞(ush)+目的語相当語」という修飾構造になり、助動詞として用いられているならば「自動詞的形式+助動詞(ush)+斜格語相当語」という疑似修飾構造となる。もし他動詞とするならばushは「～が～にいつもある」(脚注4参照)であって、kito-ta-us-nay「ギョージャニンニクを・掘り・つけている・沢」は、「ギョージャニンニク(を)・掘ること(が)・いつもある・沢」ということになる。kito-taのような自動詞的形式は名詞として機能しえることを思い出していただきたい。このようにみると「頻出アイヌ語地名」には疑似修飾構造がないということになる。

知里のushについての説には1つ疑問がある。「(動詞の後ろについて) いつもそこでその動作がおこなわれる」ということを言う前提として「いつもそこにある」という意味を設けたのではないだろうかという疑問である。

以上述べてきたushを間にはさむ疑似修飾構造(修飾構造かもしれないが)は14例みられる。またこの他、例外的な構造のものが1例ある(§7.3)。

## 7.1 「自動詞+ush+斜格語相当語」

Terkeushnai 127 12 nai 「terke-ush-nai(飛びはねる・いつもする・川)」(Y)

Ikaushnai 139 11 nai 「永田地名解は『イカウシ。越す処』と書き、旭川市史(知里博士筆)も『イ・イカ・ウシ i-ika-ush-i それを・越え・つけている・所』と書いた』(Y) この解釈は「ika いカ ((完) またぐ; 越える: 溢れる。[< i-kasu(それ・の上を越す)]」(C) という記述と矛盾する。自動詞(=完動詞)は不定人称接頭辞目的格形 i- をとれないからである。しかし『アイヌ語沙流方言辞典』[20]では、ikaは自動詞としても他動詞としても用いられることが示されている。それゆえ「不定人称接頭辞目的格形+他動詞+ush+斜格語相当語」の可能性もあるが、いずれにしても「自動詞的形式+ush+斜格語相当語」という構造となる。

Inunushnai 178 9 nai 「漁のために水辺に出向いて滞在する」(C) ナィ; 「川或は海の岸に立てて漁季だけ寝泊りする小屋」(C) があるナィ(後者のように解釈すれば「主語+他動詞+目的語相当語」となる)

### 7.1.1 斜格語相当語の位置を名詞的接尾辞が占めているもの

Terkeushi 75 17 -i 跳ねるところ(難所)

Wawaushi 127 12 -i 「川を徒渉する」(C) ところ

Oinaushi 152 10 -i 「(前略)永田地名解は oina ushi(女の歌を歌ひし処)と書き、イナウ説ではないと云、と注記した。知里博士は o-inaw-us-i(そこに・幣・群立する・所)と後説の方で書いた」(Y) 知里の解釈は o- を充当相の接頭辞ととっているが、誤り。「川尻に・イナウが・群立している・(そういう川尻を持った)ところ」o- を部分接頭辞とみるこの解釈では、「目的語相当辞[所属物]+主語+他動詞+斜格語相当辞[所属先]」という構造なる(cf. §6.5.1)。

## 7.2 「目的語＋他動詞＋ ush ＋斜格語相当語」

Kinachaushnai 18 29 nai キナを刈るナイ

Chiptaushnai 54 21 nai 「舟を・掘る・いつもする・沢」(Y)

Puitaushnai 66 19 nai 「エゾノリュウキンカの根を・掘る・習わしになっている・沢」(C)

Tureptaushnai 102 14 nai ウバユリを掘るナイ

Kukarushnai 127 12 nai 「ku-kar-ush-nai 弓を・作る・いつもする・ナイ」(Y)

### 7.2.1 斜格語相当語の位置を名詞的接尾辞が占めているもの

Chipkarushi 27 26 -i 「舟材を切って舟を造る場所。チピカルシとなまる。[chip-e-kar-us-i 舟を・そこで・作り・つけている・所]」(C) 知里がなぜ充当相の接頭辞 e- を補ったのかはよく分からない。いったい「目的語＋複他動詞 (e-kar) ＋ ush ＋目的語相当辞」のような構造の合成名詞は存在するのであろうか。ここでは e- はないものとしてあつかう。

kinachaushi 102 14 -i 「キナ・チャ・ウシ (草を・刈る・処)」(Y)

Herokikarushi 178 9 -i 「heroki-kar-ush-i (鯿を・捕る・いつもする・処)」(Y)

## 7.3 「他動詞＋ ush ＋斜格語相当辞」

Makaushi 69 18 -i (津軽の地名「マッカ石」に関して)「マカウシは北海道に多くまず浮かんで来る言葉だ。マカは「拡げる」の意で、此の地名の語意は「拡げているもの」。北海道で知って居る限りでは、二つの川が普通よりずっと大きい角度で合流して居る地形の処につく」[4, p. 155] 山田の説明には否定しがたいものがあり、我々は1例ではあるけれど「他動詞＋ ush ＋斜格語相当語」という修飾構造でもなく、疑似修飾構造の要件を満たしてもいない構造のあることを認めざるをえない。

## 8 主要部のない地名

「頻出アイヌ語地名」のうち主要部のない地名には、「自動詞」「主語＋他動詞」の2種がある(6例)。

「主語＋他動詞」は、欠けている目的語相当語が指示するべきものを指示する合成名詞である。ただし、主語の位置に不定人称接頭辞主格形 chi- が現れるものは「自動詞」したがって「行為を表す名詞」ともみられる。

Chi-nomi (§8.2.1) と関係が深い chi-nomi-shir について山田は「ここでバセ・オンカミ (重い・礼拝) する時は、元浦川の荻伏から様似までのコタンの長老が丘上に集まり、めいめいのイナウ (木幣) を立ててお祭りをした処だという。この場合のチノミシリは、礼拝の対象になる山ではなく、『礼拝の場所であった』山なのであった」[6, p. 344] と述べている。nomi は普通「～が～を礼拝する」という意味の他動詞と考えられているが、日高地方浦河では「～が～(場所)で礼拝する」という意味となることもあるとしないといけないのか。そうではなかろう。上で述べたように主語に相当する要素が不定人称接頭辞主格形である場合 (chi- ＋他動詞)、これが行為を表す名詞となることがある。次のような例がある [21, p.25]。

*chikashnukar nakka shipase ike*  
お恵み のうちにも最も大きいお恵

日高地方浦河の chi-nomi-shir は疑似修飾構造すなわち「名詞＋名詞」型の地名と考える方が良いように思われる。もしその山が礼拝の対象であれば「主語相当辞＋他動詞＋目的語相当辞」としなければならない。各地の chinomi がどちらの構造に由来するのかは「記述的研究」から知るしかない。

山田がコイトイを koy-tuye 「波が・切る」としたのはなぜであろうか (§8.2)。素直に読むと koy-tuy 「波・切れ」となる（切れるのは波ではなく—そうであれば「主語＋自動詞」という文になってしまう—砂浜（砂州）である。自動詞、この場合は tuy 「～が切れる」、はずで述べたように (§7) 行為を表す名詞になりうる [11, pp. 117-118]）。したがって、「名詞＋名詞」という型のものとも見ることもできるのではなかろうか。

「自動詞」という単純な形のもものは Aikap 1つである (§8.1)。aikap の意味は「～（行為者）にはできない」と想定される（e-aikap は充当相の接頭辞のついた形で「…することができない」という意味の助動詞となる）。地名としては、欠如している主語相当語が指示するはずのもの（行為者）を指示するものとはなっていない。自動詞の名詞化の1例とみるのが適当と思われるが、そうであれば行為を表す名詞になるはずであり、それがただちに地名となっているのがこの解釈の難点である\*18。

## 8.1 「自動詞」

Aikap 66 19 φ 「けわしくて通りぬけられぬような岬」(C) 自動詞

## 8.2 「主語＋他動詞」

Chiraiot 27 26 φ イトウ「が郡在（群居、郡来）する」(C)（知里は ot を完動詞（＝自動詞）としているが、不完動詞（＝他動詞）の誤り。山田は「たぶん後にナイがついたのが略された形であろう」(Y)) とする。

Koituy (Y: Koytuye) 27 26 φ; tuy 「川尻の処が、砂浜の中を海岸線に平行したような形で流れている処の名で、風波がその砂浜を破り、川がそこで海に直流するようなことがあるので」(Y) 「どこも川の下流が海岸砂丘の後を横流している処で、海波が荒い時に、その砂丘を破って川に打ち込む処から」(Y)；「名詞＋名詞」型の可能性もある (cf. §8)

Rueran 127 12 φ 「坂；坂の降り口」 「主語＋充当相の接頭辞＋自動詞」この構造については文献 [11, p.116] を参照されたい。

Shipeot 178 9 φ 「標津については上原熊次郎は『シベツとは大川という事。此川近辺の大川なる故此名ある由』と書き、松浦武四郎知床日誌は『シベツ。シベヲツの訛り。鮭有る義なり』と書いたが、どれも当時のアイヌからの聞き書きらしい」

### 8.2.1 不定人称接頭辞主格形が主語の位置を占めているもの

Chinomi 113 13 φ; chinomi 我らが～を礼拝する（不定人称接頭辞主格形＋他動詞）；礼拝（名詞 cf. §8)

\*18 この他、O-ya-kot (§6.1) は主要部となるはずの所属先を欠いた例かもしれない（主語相当辞 [所属物] ＋目的語＋他動詞）。Poro-piri (§6.1) も主要部となるはずの所属先を欠いた例かもしれない（自動詞＋主語相当語 [所属物]）。また Pet-eukopi (§6.2.1) は「主語＋他動詞」である可能性がある。

## 9 構造のわからない地名

最後に構造のつかめない6つの地名をあげる。

Mena 23 27 (不明) 「☒上流の細い枝川。☒【シズナイ】たまり水」(C) 「メナの語意も分からなくなった。知里博士はMEM・ナイ (mem-nai 湧泉池・の川) のつまった形じゃないかしらと話しておられた」(Y)

Petanu 40 23 (不明) 二股 「アイヌ語では二股をベテウコピあるいはペタウ (pet-au 川・枝) で呼び、すこし訛ってペタヌともいう」(Y) (名詞+名詞の可能性はあるが、「訛ってペタヌ」というのが理解できない)

Ioroushi 69 18 (不明) 「☒イウオロウシ iwor-ush-i 狩獵地・にある・川) ☒エオルシ (e-or-ush-i 頭が・水に・ついている・もの → 山の出先が水辺に突き出ている処) ☒イオロウシ (i-oro-ush-i それを・水につける・いつもする・処) のような形が考えられる。たぶん最後の形で、虹別の辺のコタンの人たちがおひょう楡とか、いらくさとかの皮を、繊維をとるために、温泉につけてうるかした場所だったのでこの名で呼ばれたのではなからうか」(Y) ☒の説に従うなら、不定人称接頭辞目的格形+他動詞+ush+斜格語相当辞、すなわち §7.1.1 ないし §7.2.1 に準じる構造に該当する。oro は \*wor-o 「～が～を水につける」が本来の形だと考えられる。この o は動詞の中ではきわめて珍しいもので、単純動詞 [1, p. 61] であるにもかかわらず複他動詞(「～が～を～に入れる」)である。なお、他動詞の o 「～が～にある」という同音異義語もあるが☒の説では使えない。

Iwanai 69 18 (不明) 「岩内と呼ばれる川はどこでも意味がはっきりしない」(Y)

Masaramama 139 11 (不明) 「西蝦夷日誌は『マサラママ。平浜』と書いた。彼は方々のマサラカオマプ 『masar-ka-oma-p 海浜草原・の上・にある・もの (川)』をこの形で書いた」(Y) 「マサラカオマプは masar-ka-oma-p 『海浜草原の・上・にある・もの (川)』の意で諸地に散在する川名であった。松浦図の方々に書かれたマサラママという川名は、調べて行くと実はこの形の川のことなのであった。多くの場合川尻に近い処に横から入っている川で、つまり砂浜の上の草原の処を横流して来るからその称があったものらしい」(Y) masaramama が masar-ka-oma-p と名付けられた場所と同じ地形であったということであろうか。あるいは別の資料で masar-ka-oma-p とある場所を松浦武四郎はマサラママと記しているということだろうか。amama ないし mama は分からない形式である。

Naitaipe 139 11 (不明) 『『永田地名解はナイ・タ・ユペ。川・鮫』と書いた。yupe は蝶鮫のことである。ただしこのナイタイプも分からない地名の一つであった」(Y) nay に後置詞 ta (場所を表す) は直接付くことができない(脚注 15 参照)。また、たとえば nay oske ta 「ナイの中に」という副詞句であったとしてもそれが直接、名詞を修飾することもない。

## 10 おわりに

213の「頻出アイヌ語地名」においてもその由来・意味が分からないのが6つもあった。というよりも、近代以前はしばらくおくとして、永田方正、金田一京助、服部四郎、知里真志保、山田秀三、本論文では触れなかったが神保小虎 [2] というごくわずかの人がアイヌ語地名に強烈な関心を持ち、その由来・意味の解明に大きなエネルギーを割いてくれたおかげでここまで分かるようになったと考えるべきだと思う。

研究対象を希少のアイヌ語地名に広げればもっと多くの形態論的構造が見つかるであろう。私にとってその

線での研究へ最初の一步を進めるきっかけを与えてくれたのが知里真志保の『アイヌ語入門』[17]であり、またそれとは全然性格を異にする羽田野正隆の研究『アイヌ語地名の史料における出現頻度』[14]であった。

山田秀三の生前をしのびながら小論を書いた。

## 参考文献

- [1] 切替英雄. アイヌ語とはどんな言語か 一つの派生動詞をめぐって. 月間言語, Vol. 14, No. 2, pp. 60-66, 90, 1985.
- [2] 切替英雄. 神保小虎のアイヌ語への関心. 小谷凱宣(編), アイヌ文化の形成と変遷, pp. 71-79, 1996. 平成7年度文部省科学研究費補助金(総合研究B)研究成果報告書 課題番号 07351003.
- [3] 切替英雄. アイヌの地理的認識. 北海道開発の論点・視点, pp. 67-86. 北海学園開発研究所, 1998.
- [4] 山田秀三. 津軽半島の記録, アイヌ語地名の研究 山田秀三著作集, 第3巻. 草風館, 1983.
- [5] 山田秀三. 北海道の川の名, アイヌ語地名の研究 山田秀三著作集, 第2巻. 草風館, 1983.
- [6] 山田秀三. 北海道の地名. 北海道新聞社, 1984.
- [7] 渡辺仁ほか. 昭和58年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1983.
- [8] 渡辺仁ほか. 平成4年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1993.
- [9] 渡辺仁ほか. 平成8年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1996.
- [10] 永田方正. 北海道蝦夷語地名解. 国書刊行会, 復刻版, 1972.
- [11] 切替英雄. アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞. 言語研究, No. 86, pp. 105-121, 1984.
- [12] 切替英雄. 書評山田秀三『北海道の地名』. 読書北海道, No. 86, p. 2, 1984.
- [13] 金田一京助. 地名エゾ語釈の方法とエゾ語の史料. 金田一京助全集, 第6巻. 三省堂, 1993.
- [14] 羽田野正隆. アイヌ語地名の史料における出現頻度. 北方文化研究, No. 20, pp. 17-32, 1989.
- [15] 知里真志保. 斜里郡内アイヌ語地名解. 知里真志保著作集, 第3巻, pp. 247-268. 平凡社, 1973.
- [16] 知里真志保. 地名アイヌ語小辞典. 北海道出版企画センター, 1984. 復刻版.
- [17] 知里真志保. アイヌ語入門. 北海道出版企画センター, 1985. 復刻版.
- [18] 服部四郎. カラフト西海岸北部地名の共時論的研究. 佐々木弘太郎(編), カラフトアイヌ語地名小辞典, pp. 1-53. みやま書房, 1969.
- [19] 田村すず子. アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造. アジア・アフリカ文法研究, No. 1.
- [20] 田村すず子. アイヌ語沙流方言辞典. 草風館, 1996.
- [21] 知里幸恵. アイヌ神謡集. 岩波文庫. 岩波書店, 1978.
- [22] 金田一京助. アイヌ叙事詩ユーカラの研究, 第2巻. 東洋文庫, 再版, 1976.